

ビルマ仏教の全体像をめぐって

— その人類学的考察 —

高谷紀夫

An Anthropological Study of Burmese Buddhism

Michio TAKATANI

Abstract

- a) The following six aspects of Burmese Buddhism will be treated.
- 1) To what extent the world of sangha can be said to be the center of Buddhism.
 - 2) To what extent Buddhist belief can be said to be canonical.
 - 3) The differences between Buddhist factors and non-Buddhist factors or magical factors.
 - 4) The principles by which Buddhist organizations operate.
 - 5) Buddhist mentality
 - 6) Messianic or millennialistic religious movements.
- b) From a religious system point of view, Burmese religious life will be grasped through three principles which intersect in their world-view.
- 1) The world of sangha / the world of laymen : this differentiation is basic to a Buddhist world.
 - 2) Practical interpretation of the doctrines / Normative interpretation of them : this differentiation is flexible and represents the complexity of Buddhism.
 - 3) The individual / the group : it is not easy to see that there are any principles of organization, and it is said that in Burmese society dyadic relationships function as social ties. The position of the individual and group in religious terms and in social terms must be discerned and analyzed. On the basis of the study of these principles, we shall analyze how the Burmese view Buddhism.
- c) In the Burmese language, there are several important key-terms like *kutho* (merit), *kan* (karma), *pon*, *awza*, *gon* (power) and so forth, which have profound Buddhist ramifications, but which are also used casually in daily life. Behind such native terms, there may be some keys for an understanding of Burmese society.

I. はじめに

フィールド・ワークを経ないで文献研究に基づいて人類学的考察を進めようとする場合、

先達の研究者の追ったテーマに制約を受けることはやむをえないことであろう。ビルマに関する宗教研究がまさにそれにあたる。後述する研究動向に加えて、ビルマは1962年以降政治的事情から長期のフィールド・ワークが制限されており、限られた資料から考察の端緒を見つけないといけないというのが現状である。最近、社会人類学的な分析も発表されつつあるが¹⁾、その随所に宗教的背景への言及をみてとることができる。社会生活における信仰の顕在性を改めて認識するに至るのである。

本稿は、ビルマ仏教を中心に既存の人類学的考察の成果をたどりながら、仏教信仰の社会的脈絡とのつながりをその全体像の追求という観点から探求する初歩的論説である。

II 仏教信仰の特異性

宗教に関する人類学的な考察においては、世界観、宗教観の中に宗教的概念などの諸観念がどのように浸透、整合しているかという観念的側面と、諸観念や具体的な儀礼が日常生活の枠組みといかにからみあっているかという実践的側面の分析が重要な作業である。仏教世界の実態もその両面からたどることが必要であろう。東南アジア大陸部及びスリランカで信奉されている仏教を考察する人類学的研究において、観念的側面を考える場合、文字文化の果たす役割を忘れることはできない。仏教世界における伝統文化は、経文を媒介とする文字文化がその一翼を担ってきた。つまり、文字で記されたものが信仰のチャンネルとして機能し、文字を読むことあるいは記憶することが儀礼の重要な部分を構成しているのである。実践的側面に関する分析では、主として村落生活の場がひとつのいわば閉じた世界として描かれることが多かった。つまり、村落世界が考察上の日常生活の外枠をなしてきたのである。以上の概観を前提にして、本節では、先達の研究者によって提出されてきた仏教信仰の特異性を洗い出すことにしたい。

仏教世界の実態は次の諸点にまとめられよう²⁾。

- a 僧侶——出家中心主義であること。
- b 実践的翻訳が許容されているという点で教条主義的でないこと。
- c 他の宗教的呪術的要素との関係があいまいであること。
- d 仏教徒の組織が不明瞭であること。
- e a～d と関連した心性の特異性。
- f 千年王国論的性格をもつ宗教的運動の顕在。

これらの特徴から、キリスト教世界で育った人々が仏教を奇異に感じ、未開宗教、無文字文化を主たる研究対象としてきた人類学者が、文字文化と精霊信仰の併存に当惑に覚えたことは想像にかたくない。H.—D. Evers をして「不完全な宗教」といわしめたのもこの所以である³⁾。上述の諸点は、仏教信仰の特徴のすべてを列挙したとは必ずしもいえないが研究動向をたどる意味で有効であり、また今後の調査研究によって修正されるべき性質のものを付けて加えておきたい。

a 僧侶——出家中心主義であること

この特徴は、出家者の宗教的実践がエリート宗教として俗界から空間的にも社会的にも隔絶された世界でなされていることをさしている。

この特徴をとらえて「大伝統」と「小伝統」の二元論を導入する研究者がいる。M.E.Spiroが、教義としての仏教を大伝統に、信仰生活の実践をその変容として小伝統にそれぞれ対応させているのも一例である⁴⁾。

「大伝統」「小伝統」の二元論的観点を社会科学の方法として導入したのはR. Redfieldであった。彼は、複合文化を考察するにあたって、哲学者、神学者、宗教実践者といった知識人の中あるいは寺院もしくは学校という知識伝承の場で培われてきた大伝統と、村落社会の人々の間でほとんど当然のこととして受容され維持されている小伝統に識別し、その差異及び相関関係に注目したのである⁵⁾。一方、DumontとPocockは二元論的なとらえ方が当事者の意識を反映していないとして、農民文化——小伝統を単一の伝統として強調し、研究者によって構築される教義的哲学的伝統と対照させている⁶⁾。G. Obeyesekereは、このDumontとPocockの主張に同調して、小伝統を農民社会の総体的文化とした上で二元論的アプローチの有効性を認めている⁷⁾。このアプローチに対し批判的なのはS. J. Tambiahである。彼は、その根拠として村落が社会生活の単位をなさず社会学的存在とは程遠いこと、普遍化、地方化で描かれる文化変化の過程がかかわるのはむしろ宗教からはみだした部分であり、宗教体系そのものとは関連性がないことをあげている⁸⁾。

仏教世界における大伝統は、出家者の宗教的実践に象徴されるだけでなく、經典に伝えられ、抽象化理想化された伝統でもある。しかも、その經典は出家者の独占ではなく在家仏教徒も照会することが可能であり、いわば開かれた大伝統の様相を呈している。従って、經典に記された仏教を理想型として大伝統に対応させ、全体像としては、小伝統を現実の表現型として把握した場合に、二元論的アプローチは有効となるように思われる。

Tambiahの批判は、ふたつの伝統を社会的次元に還元した場合の難点をついている。実態研究は、主に村落世界をフィールドとして行なわれてきた。彼の批判はその村落の単位としてのまとまり自体を問題にしているのである。この点は、dの特徴としてあげた仏教信仰の側面とも関連し、また今後の調査におけるフィールドの設定の際の留意を喚起する。

b 実践的翻訳が許容されているという点で教条主義的でないこと

この特徴は、仏教が神をたてない宗教であること⁹⁾、輪廻転生、業、涅槃といった教義的深遠性の濃い観念に価値を与えながらその解釈が決定論的でないことをさしている。この点は、キリスト教世界の価値観と対照的である。解釈が決定論的でないことは、信仰形態のヴァリエーションが許容され、教義自体が説明枠の広いチャンネルをそなえていることを意味する。諸観念は、そのチャンネルを通じて世俗的なものへと「翻訳」されているのである。究極的目標である涅槃は、輪廻から離脱して彼岸の境地に達するより輪廻に留まって人間界での生活の経済的向上を望む実践的翻訳を通じて、より非現実的なものとなっている。また、特に教義解釈が必ずしも厳格でないことを明示するのは靈魂についての考え方である。「仏教は転生する恒久的な靈魂の存在を否定している」¹⁰⁾とするある出家者の主張がある一方で、

ビルマでは個人に属する靈的存在である *leikpya* が信じられている¹¹⁾。この靈的存在は、睡眠中に体内から遊離することもあり、また死の瞬間に完全に体から離れると考えられている。さらに民俗的に広く *nat* と呼ばれる靈的存在に儀礼的配慮が示される。この矛盾は、実践的翻訳において、靈魂観が支配する——少なくとも靈魂の存在を否定しきれない——世界観が浸透していることを示しているといえるのである。この点は次の c、の特徴とも関連している。

c 他の宗教的呪術的要素との関係があいまいであること

この特徴については、フィールドの地域性とも関連し研究者の展開する論説はさまざまである¹²⁾。しかしながら、仏典に伝えられている抽象化理想化された仏教とは別に、非仏教的要素がみられるという認識では一致している。そして論説の差異は、非仏教的要素を信仰体系のどこに位置付けているかに示される。そのいくつかをあげて考察してみよう。

A. T. Kirsch は、タイ仏教の複合性を、「歴史的に区別されるいくつかの伝統に由来する要素が単一で独特な伝統を形成している」ことから「シンクレティック (syncretic)」と特徴づける。さらに信仰当事者にとっては諸要素間の不一致の意識はないと前提した上で「仏教」「Brahmanism」「animism」を3つの構成要素として分析している¹³⁾。

E. M. Mendelson は、ビルマにおける信仰形態を、仏教から *nat* 信仰までを単一の宗教体系の連続体としてとらえている。彼は、仏教と *nat* 信仰の間に、もうひとつの構成要素として、占星術、錬金術、秘義などの特別な力をもつと信じられている *weikza* を活動の中心とする信仰を位置づけている¹⁴⁾。

R. F. Gombrich は、シンハリ仏教文化を考察して、非仏教的要素との併存をシンクレティズムとみなすことを批判して、「超自然的存在は、今日、村落レベルの仏教徒の宇宙観においてそうであるように仏教の宇宙観の一部であった」と指摘する。彼がいわんとしているのは仏陀の時代より超自然的信仰がすでに仏教信仰の枠組みの内にとりこまれていたという通時的不変性である。彼は現実の信仰形態を「アクレティヴ (accretive)」として分析する¹⁵⁾。彼の主張に同調する青木 保氏は、仏教の宗教的性格はその発端から他の宗教的要素を包含しており、その複合性こそ仏教の宗教としての特徴と指摘している¹⁶⁾。

Gombrich、青木両氏の指摘の基底にあるのは、仏教的要素と非仏教的要素が長い間併存してきた歴史とその区別が困難であることの認識である。この観点に立てば、複数の伝統の出会いを想定した歴史的再構成の作業は留意を要することになる。仏典に伝えられた「純粋な」仏教は、実態においてその発端より存在しなかったことになるからである。また、その一方で仏教徒と自称する信仰当事者にとっての「仏教」の意味合いが改めて問われてくる。というのは、従来研究者を悩ませてきた要因のひとつは、「仏教徒」という自称と精霊信仰実践との矛盾である。両氏の観点に従えば、この矛盾は研究者の頭の中で作られたものということになるのである。仏教は、インド思想の潮流の中ではぐくまれた伝統である。また、考察上非仏教的要素と分析されているものにインド起源のものが少なくない。従って通時的にみて彼らの指摘は妥当であろう。また、両氏の指摘は、別の見方をすれば、信仰当事者にとっての「仏教」が多様な宗教的説明を受容する余地をその中にそなえているともいえることができるように思われる。ただし、仏教の宗教としての特性を複合性とした場

合においても、問題となるのは信仰体系の構成要素である。kirsch, Mendelson の分析による構成要素は、その列挙及び相互関係の探求が考察の目標となっているのに対し、Gombrich, 青木氏にとっての非仏教的構成要素は、あくまで従属的な位置におかれ仏教の全体像がまず優先されているのである。また、前者が共時的側面における併存に注目しているのに対し、後者が通時的認識から複合性を導いたという相違もある。

上述の研究者の考察は、仏教的要素と非仏教的要素の併存をいわばひとつの信仰体系の中に組み込んだものであった。一方、その要素間に明確に一線を画すことを結論としているのが、シンハリ人の信仰を研究対象とした M. Ames¹⁷⁾ と、ビルマをフィールドとした M. E. Spiro¹⁸⁾ である。両氏は、非仏教的な信仰を仏教信仰に対するものとして、Ames は「magical animism」、Spiro は「nat religion」と呼んでいる。Ames の提示するシンハリの宗教は、究極的来世的な利害に関与する仏教的要素と世俗的現世的な事柄に関与する非仏教的要素によって構成されているものとして全体像が描かれている。Spiro は「世俗的目的のために、仏教、nat 信仰の双方が活用される場合がある、しかし nat 信仰が来世に関与することはない」¹⁹⁾ と指摘し、仏教が来世での良き転生を果たすための排他的手段であることを明示するとともに、nat 信仰の現実世界における浸透を明言している。両氏は、シンハリ、ビルマそれぞれの宗教世界で仏教が優位にあるという認識では一致している。Spiro が nat 信仰をひとつの宗教体系として提示していることに対して疑問をなげかけ、土着宗教対ヒンドゥ教、それを調停する仏教という三極構造と理解した方が自然とする向きがある²⁰⁾。この Spiro 批判の背景にあるのは「パンテオン」の構造への志向であるように思われる。現時点において nat 信仰をひとつの宗教体系としてとらえるかについては慎重にならざるをえないが、パンテオン構造への志向も保留を要するのではないだろうか。というのは、各フィールドにおける神格あるいは超自然的存在の信仰上の役割とその位置付けを仔細にたどった場合必ずしもパラレルとはいいがたい点があるのである。たとえば、スリランカにみられる deva のための寺院や祠はビルマにはなく²¹⁾、その信仰上のかかわりは守護の要請の際に限られる²²⁾。また、ビルマの nat とタイの phii の信仰上の関与にも相違点がみられる。悪霊としての基本的評価は同様にしても、nat が、出産、イニシエーション、結婚式などの人生儀礼に関与するのに対し、タイにおいて通過儀礼の諸段階において招請されるのは phii ではなく khwan と呼ばれる霊的存在である²³⁾。khwan は個人に付随するという性格ではむしろビルマの leikpya に似ている。

仏教的要素と非仏教的要素との境界があいまいであるという特徴は、ひとつには「自称仏教徒」という少なくとも表面上における仏教の優越が要因であり、もうひとつには研究者自身の考察の手順によるのである。抽出された諸要素は必ずしも信仰当事者の考えと一致するとは限らない。従って、民俗的解釈を追求するならば、境界が不明瞭であるだけでなく境界を設定すること自体の妥当性を考察しなければならないのである。そのことは、さらに社会的脈絡における「宗教」の民俗概念を改めて問うことにもつながっていくのである。

d 仏教徒の組織が不明瞭であること

僧侶の集団は sangha と呼ばれる。だがこの sangha には集団の結束性が一般に不明であ

り、むしろ社会学的レベルでは、僧侶全体をとらえる総称とみなした方が妥当である。仏教の各宗派にも、結束性及び中央の統率力が一般に不明瞭であり、宗派間の対立も必ずしも顕著ではない²⁴⁾。ヒルマの場合、大半を占める **Thudhamma** 派が特に不明瞭で、しかも教法遵守に関して穏健とされ、他の宗派とも友好的で援助しあっているとされている²⁵⁾。いわば、各宗派の師資相承の伝統は、すべて **Theravada** 系という大幹流の中にたどることができるのである。

僧侶の集団としての組織が明瞭になるのは、僧院ひとつひとつを単位とする共住集団のレベルにおいてである。僧院間や同一宗派の上のレベルでの交流は一般に必ずしも密ではない²⁶⁾。つまり、信仰生活の核を各僧院が独立的になしているのである。各僧院を維持しているのは喜捨行為を媒介とする周辺の地域との関係である。**Tambiah** によれば「僧院が村落と区別されるなら、僧院はまた村落の中心的建造物であり、僧院が村落生活から隔離されているとするなら、総体的にみて村落生活は僧院の領域内で動いている」²⁷⁾のであり、僧院及びその成員である僧侶と在家仏教徒との交流は仏教信仰の最も重要な基礎的部分を構成しているのである。

一方、在家仏教徒の集団、組織もその地域内の僧侶を核にとらえることが可能である。早朝の僧侶の托鉢巡回路は慣例化しているのが一般的であり、特定の僧院、僧侶との関係や交流は多くの場合地域が一体となる。

しかしながら、僧侶の特定僧院への帰属は永続的では必ずしもなく²⁸⁾、在家仏教徒も居住地域に限らず広く信仰の場を求める。その背景にあるのは、どの僧院においても、またどの僧侶に対してもそれ相応の功德が獲得される仏教信仰の遍在性である。

さらに問題とすべきなのは、仏教の自己救済の考え方と社会の組織立てとの関係である。救済のための手段である功德は、行為から獲得へのプロセスが自己完結的であり、仏教信仰が個人レベルでとらえうることを示している。その仏教信仰の基調と **J. F. Embree**²⁹⁾ がタイ社会を特徴付けた「ゆるやかに組織された社会体系 (**loosely structured social system**)」とを結びつけてとらえる論説がある。これに対し、中部タイを調査した **J. Bunnag** は、各種の仏教儀礼の観察から、むしろ仏教が個人間の社会的連帯を積極的に促進し、また共同関係を作り出す契機を提供していると反論する³⁰⁾。**Embree** の着眼は、社会構造の全体像のイメージ化に貢献し、指摘として鋭く他の東南アジア諸地域への応用の余地を示すものである。だが、その考察には、社会内の組織集団への論及が不十分であり、また比較の観点も明確ではない。

仏教では自己救済の考え方が強調されているとはいっても、**Gombrich** が指摘しているように「個人的」な宗教は単独では決して存在しえず³¹⁾、いわば大衆に支持された「集団的」な宗教の内においてのみ顕在化する信仰の一側面と思われる。宗教のもつ必然的な集団性と教義上における個人の強調が一見背反しながらも維持されている点を再考する必要がある。**Bunnag** の反論の評価は、さらに社会的脈絡における個人の論理と非宗教的な集団の組織原理を考慮した上でなされなければならないだろう。

e a～dと関連した心性の特異性

この特徴は、仏教徒の抱く理想と実際の行動様式との差異に注目しての提示である。たとえば、男子仏教徒にとって僧侶となって自己のために修行することが宗教的にも社会的にも高く評価されているにもかかわらず、多くの場合その修行はライフ、サイクルに組み込まれた一移行期にすぎないのである。その背景に実践的翻訳を認めることができる。このような独特な仏教徒の心性形成に関して、G. A. Kell のビルマについての論文³²⁾があるが、ここではより広汎に展開される M. E. Spiro の論説をたどってみることにする。

Spiro は、まず宗教を「文化的に自明とされた超人間的存在との文化的に範型づけられた相互作用によって構築されるひとつの制度」と定義する³³⁾。彼の定義は、超人間的存在とその力能への信仰の普遍性の認識に基づいており、さらにパーソナリティ、心性の探求をめざしている。そのために、彼のビルマに関する一連の著作は、民族誌としての性格よりも理論的考察が前面におしだされている³⁴⁾。彼のいう宗教は、文化的に構築された認知体系をなし、その分析は、信仰面における変数に留まらず、心理的変数にまで還元されて進められていく。その理論的志向は、原始仏教学、仏教史学で代表される文献学と人類学的研究とのギャップを埋めることを意図していると彼は説明する³⁵⁾。宗教的实践を特定の教義に帰して説明することの勇み足——仏教教義がそのまま実践されている錯覚——を避けるために、彼は、さらに宗教の果たす機能を、1) 苦悩についての説明、2) 苦悩の回避、克服の手段提供のふたつの点にまとめる³⁶⁾。このように、Spiro の論説は、宗教の一般化を前提に心理学的分析を展開していくことを特徴とする。仏教徒の行動様式と心性との関係を考察することは、仏教の宗教体系としての全体像を探るひとつの糸口となるかもしれない。ただし、その際、Spiro に関していえば「苦悩」の民俗概念を規範的翻訳ではなく実践的翻訳の観点からさらに社会的脈絡に照らしあわせてみなければならぬだろうし、心理学的な「個人」と社会的な「個人」の意味合いも平行して考察する必要があると思われる。この社会的脈絡への照応不足という点で Spiro の分析には疑問が付きまとうことを付記しておきたい。

f 千年王国論的性格をもつ宗教的運動の顕在

仏教信仰の諸側面の中でもうひとつ考慮しなければならないのは、千年王国論の観点からとらえることが可能な未来仏信仰と、それと深いかかわりをもつ近、現代の新興宗教運動である。未来仏信仰は、未来志向 (future orientation) のひとつの表現であり、仏教徒のもつ時間観³⁷⁾とも関連する。この動向は、自己救済を基本とする仏教の考え方は論理的に相容れないものであるが、各研究者の報告に示されるように³⁸⁾、仏教徒の宗教観を考える際に、またその大衆性から集団組織原理の分析を試みる際に忘れることはできないのである。多くのこの種の宗教的運動に共通した特徴は、仏教徒一般の組織よりも、ひとりもしくは複数のかなり現実性のある人物を中心に比較的強固に組織化されていること、仏教教義との調和を主張して、仏教徒という自称と自己矛盾していないことなどである。ビルマでは、Mendelson が一連の論文で報告しているカリマスの存在 *weikza* を中心とした *gain* の運動が目される。M. Nash は「どんな組織にしろその組織は仏教の構造から生じるのではなく特定の僧侶のカリマスより生じる」と指摘し³⁹⁾、タイの同様な動向を考察する C. F. Keyes は、仏教自

体が千年王国論的解釈を許容しているとしてその内在的寛容性を論述している⁴⁰⁾。Nashの分析は、知識の伝達者としての役割を果たしてきた僧侶の社会的評価にもかかわり、また Keyesの指摘は、仏教の全体像をイメージ化する際の端緒となるかもしれない。歴史的にみて、新興宗教だけではなく民族運動の背景に千年王国論的性格をたどることもできる。そこにみられるのは、現状の改善を目標にかかげる未来志向のモチーフであり、あるいは社会的危機を打開せんとする動きである。

III 試 論

仏教の特異性をたどることで、その社会的脈絡とつながる3つの原理を分析することができよう。

- 1) 「出家」と「在家」の区分
- 2) 教義の「規範的翻訳」と「実践的翻訳」
- 3) 信仰を支える「集団」と「個人」

この3つの原理は交差しながらビルマ社会の宗教的側面を形造っている。「出家」と「在家」の区分は、社会的に認められたふたつの領域を画し、衣食住、言語などあらゆる生活の諸側面で異なる様式をもつことで確認することができる。ふたつの領域が接触あるいは交差するのが考察上仏教儀礼と呼びうる場面である。教義の「規範的翻訳」と「実践的翻訳」の区分は、教義解釈の巾の広さ、さらには仏教のもつ複合性及び寛容性を表徴する原理である。だが、この区分は1)の区分とは必ずしも重ならない。なぜなら、「出家」の世界は、社会的に認知された非社会的存在として維持されているが、決して閉じた世界ではなく、仏教儀礼の場を通して交流するからであり、行動様式とその観念的背景にずれが考えられるからである。功德観念について例証してみよう。従来、在家仏教徒にとっては、自己自身の宗教的实践よりも *sangha* の維持に対する直接的貢献——喜捨行為が優越していると論じられている⁴¹⁾。だが、その行為を裏打ちする考え方もそうであろうか。喜捨——功德獲得行為において出家者の介在は重要である。それを支えるのは、出家者の宗教的实践者としての評価の高さであり、その評価は、出家者の信仰姿勢の均質性によって保持される。となれば、在家仏教徒にとっては、行動様式においては喜捨行為が優越しているが、その基底においてはやはり自己修練に対して重きがおかれていると分析しうるのではないだろうか。

功德は、仏教世界を貫く重要な宗教理念である。その功德を獲得するプロセスが自己完結的であることは先述したが、そこにみられる「個人」と社会的脈絡における「個人」とのつながりを考察するためには、信仰を支える「個人」と「集団」の対比が必要であろう。上ビルマでのフィールド・ワークに基づいて社会人類学的な考察を展開する田村克己氏の論説⁴²⁾においても、まず社会の構成単位である家族・親族集団や地域的集団といった社会的集団をとりあげるが、後半では行動様式における個人的関係 (*dyadic relation*) に注目し、*khin* (親しい) という民俗概念の分析をふまえて説明を試みている。それによれば、田村氏は、功德観念を別の他者と新たな関係をつくりだす契機として分析し、先述した *Bunnag* と同様なことを指摘する一方で、功德獲得行為を通じて得られる社会的影響力は不安定で、現世の社会関係や権力関係にはほとんど意味をもたないとも述べている。つまり集団構成原理とし

ては機能していないというのである。この点で **Bunnag** とは異なっている。それでは、ビルマには社会関係を維持、強化する原理を見出すことはできないのだろうか、いいかえれば、社会的影響力をもつ者の **power** を支える観念はないのだろうか。個人の **power** に関しては、民俗概念として **M. Nash** が、*pon awza, gon* の3つをあげている。それによれば、*pon* は世俗の意味合いで計画を遂行したり他人を意のままに動かすための男だけがもっているものである。*awza* は、*pon* をもっていれば必然的に有するとされ、役人はすべて *awza* をもつとされる。*gon* はそれに対し道徳的な力を意味するとされている⁴³⁾。これらの民俗概念への言及は、他に **Spiro** がふれている⁴⁴⁾程度であまり注目されていない。その理由も考えてみなければならない。しかしながら、*pon* は正式僧の名称 *pongyi* の *pon* に通じ、**power** の観念は仏教信仰と連関しているように思われる。従って、社会的脈絡の中でこれらの民俗概念の意味領域を探ることに研究の余地があるのではないだろうか。いわば、ビルマ社会における宗教的言語の考察である。

本稿で考察してきた仏教の特異性は、現実の信仰生活の維持を前提としている。そのために「なぜ」維持されているかの問いに答えるものではない。仏教が広い説明のチャンネルを有しているという分析も同様である。ビルマ仏教の全体像——体系を探るには「なぜ」という問いをからめて考えなければならないであろうし、上述の3つの原理の交差の分析、及び宗教的言語の探求は、今後の課題である。

付 記

本稿は、1981年11月30日、駒沢大学で開かれた日本民族学会関東地区研究懇談会での発表「ビルマの宗教と社会に関する人類学的考察——総括と展望——」をもとにしている。その際、多くの師友の方々から貴重な御教示をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

注

- 1) **Spiro** 1977, 田村 1980, 1982他
- 2) a～c の指摘は、青木 1978でなされている。
- 3) **Evers** 1968 : 549—50
- 4) **Spiro** 1970
- 5) **Redfield** 1956 : 68—72
- 6) **Dumont and Pocock** 1957 : 39—40
- 7) **Obeyesekere** 1963 : 151—3
- 8) **Tambiah** 1970 : 41—2
- 9) **Shwe Zan Aung** 1917 : 127—8
- 10) **Bhadanta Nārada Mahāthera** 1956 : 5
- 11) **Shway Yoe** 1910 : 390—5, **Ba Han** 1964 : 5

- 12) タイについては、Terwiel 1975のまとめが要領よくなされている。ビルマについては、Temple 1906, Brown 1915, 1921, Htin Aung 1962, Brohm 1963, King 1964, J. C. Nash 1966, M. Nash 1965, 1966, Pfanner 1966, Spiro 1967, Mendelson 1975 他で論説が展開されている。
- 13) Kirsch 1977 : 241
- 14) Mendelson 1961 b : 230, 1975 : 30
- 15) Gombrich 1971 : 48-9
- 16) 青木 1974 : 3
- 17) Ames 1964
- 18) Spiro 1967
- 19) Spiro *ibid* : 268-9
- 20) 杉本 1980 : 238-9
- 21) Yalman 1969 : 85-6
- 22) Spiro 1967 : 45
- 23) Tambiah 1970 : 224
- 24) M. Nash 1965 : 142-4
- 25) Pfanner 1966 : 79-80. Thudhamma 派は在家仏教徒との関係も密である。
- 26) 例外的には、上ビルマのマングレー周辺に集中する Shwegyin 派は、本山が毎年各僧院に修行者数を報告させるなどその組織は比較的明瞭である。生野 1975 : 200-11
- 27) Tambiah 1970 : 11
- 28) Spiro 1970 : 310
- 29) Embree 1950
- 30) Bunnag 1973 : Chap 6
- 31) Gombrich 1971 : 49-50
- 32) Kell 1959
- 33) Spiro 1966 : 96-8
- 34) 彼の通文化的見地からの理論的志向は、Spiro and D'andrade 1958の論文にすでに表われている。Spiro 1965, 1968にもその傾向がみられる。
- 35) Spiro 1970 : 3-7
- 36) Spiro 1967 : 2
- 37) ここでいう時間観は、形而上学的な時間論のそれではなく、民俗レベルの時間についての考え方である。Pocock 1967 : 304
- 38) ビルマについては、Mendelson 1960, 1961 a. b, 1963 a. b, Spiro 1970 : chap 7 他。1930年の Saya San の反乱についての Sarkisyanz 1975 : Chap, 22も注目される。その他には karen 族についての Stern 1968, タイについての森1978などの研究がある。また、最近、比較分析が、石井 1982によって提出されている。
- 39) M. Nash 1965 : 144
- 40) Keyes 1977

- 41) 石井 1975 : 36-7, Spiro 1970 : 103
 42) 田村 1981
 43) M. Nash 1965 : 52, 76-7
 44) Spiro 1977 : 236-7

参照引用文献

- Ames, M. M. 1964, 'Magical-animism and Buddhism : A Structural Analysis of the Sinhalese Religious System', *Journal of Asian Studies*, Vol. 23.
- 青木 保, 1974 「「ブン」と形成——タイ仏教理解のための試論」『アジア経済』 Vol. 7.
 1978 「仏教の人類学的研究について」『シンポジウム——東南アジアの宗教と芸術』 n.p.
- Ba Han, Dr, 1964, 'Spiritism in Burma', *Journal of the Burma Research Society*, Vol. 47.
- Bhadanta Nārada Mahāthera, 1956, 'The Buddhist Doctrine of Kamma and Rebirth', *The Light of the Dhamma*, Vol. 3.
- Brohm, J, 1963, 'Buddhism and Animism in a Burmese Village', *Journal of Asian Studies*, Vol. 22.
- Brown, R. G. 1915, 'The Taungbyon Festival, Burma', *Journal of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 45.
 1921, 'The Pre-Buddhist Religion of the Burmese', *Folklore*, Vol. 32.
- Bunnag, J. 1973, *Buddhist Monk, Buddhist Layman : A Study of Urban Monastic Organization in Central Thailand*, Cambridge Studies in Social Anthropology, no. 6, Cambridge Univ. Press.
- Dumont, L. and D. F. Pocock, 1957, *Contribution to Indian Sociology*, no. 1, Paris : Mouton.
- Embree, J. F. 1950, 'Thailand : A Loosely Structured Social System', *American Anthropologist*, Vol. 52.
- Evers, H.-D. 1968, 'Buddha and the Seven Gods : The Dual Organization of a Temple in Central Ceylon', *Journal of Asian Studies*, Vol. 27.
- Gombrich, R. F. 1971, *Precept and Practice : Traditional Buddhism in the Rural Highlands of Ceylon*. Oxford : Clarendon Press.
- Htin Aung, M. 1962, *Folk Elements in Burmese Buddhism*, Oxford Univ. Press.
- 生野善應, 1975, 『ビルマ仏教——その実態と修行』大蔵出版
 石井米雄, 1975, 『上座部仏教の政治社会学』創文社
 1982, 「上座部仏教文化圏における〈千年王国運動〉研究序説」鈴木中正(編)『千年王国的民衆運動の研究——中国・東南アジアにおける』東大出版会

- Kell, G. A. 1959, 'The Vital Importance of the Donation System for the Burmese', *Sociologus*, (n. s.) Vol. 9.
- Keyes, C. F. 1977, 'Millennialism, Theravada Buddhism, and Thai Society', *Journal of Asian Studies*, Vol. 36.
- King, W. L. 1964, *A Thousand Lives Away: Buddhism in Contemporary Burma*, Harvard Univ. Press.
- Kirsch, T. A. 1977, 'Complexity in the Thai Religious System: An Interpretation', *Journal of Asian Studies*, Vol. 36.
- Mendelson, M. E. 1960, 'Religion and Authority in Modern Burma', *The World Today*, Vol. 16.
- 1961 a, 'A Messianic Buddhist Association in Upper Burma', *Bulletin of School of Oriental and African Studies*, Vol. 24.
- 1961 b, 'The King of the Weaving Mountain', *Royal Central Asian Journal*, Vol. 48.
- 1963 a, 'Observation on a Tour in the Region of Mount Popa, Central Burma', *France-Asie*, Vol. 179.
- 1963 b, 'The Use of Religious Skepticism in Burma', *Diogenes*, Vol. 41.
- 1975, *Sangha and State in Burma: A Study of Anarchistic Sectarianism and Leadership*, (ed. by J. P. Ferguson) Cornell Univ. Press.
- 森 幹男, 1980, 『東南アジア——土俗の探求』平文社
- Nash, J. C. 1966, 'Living with Nats: An Analysis of Animism in Burman Village Social Relations', in M. Nash (ed.) *Anthropological Studies in Theravada Buddhism*, Cultural Report Series, no. 13, Yale Southeast Asia Studies, Yale Univ.
- Nash, M. 1965, *The Golden Road to Modernity: Village Life in Contemporary Burma*, New York: John Wiley & Sons, Inc.
- 1966, 'Ritual and Ceremonial Cycle in Upper Burma', in M. Nash (ed.) *Anthropological Studies in Theravada Buddhism*, Cultural Report Series, no. 13, Southeast Asia Studies, Yale Univ.
- Obeyesekere, G. 1963, 'The Great Tradition and the Little in the Perspective of Sinhalese Buddhism', *Journal of Asian Studies*, Vol. 21.
- Pfanner, D. E. 1966, 'The Buddhist Monk in Rural Burmese Society', in M. Nash (ed.) *Anthropological Studies in Theravada Buddhism*, Cultural Report Series, no. 13, Southeast Asia Studies, Yale Univ.
- Pocock, D. E. 1967, 'The Anthropology of Time-Reckoning', in J. Middleton (ed.) *Myth and Cosmos: Readings in Mythology and Symbolism*, New York: The Natural History Press.
- Redfield, R. 1956, *Peasant Society and Culture: An Anthropological Approach to*

Civilization, Univ. of Chicago Press.

- Sarkisyanz, E. 1965, *Buddhist Backgrounds of the Burmese Revolution*, The Hague : Martinus Nijhoff.
- Shway Yoe. 1910, *The Burman: His Life and Notions*, (3rd. ed. : 1st. ed. 1882), St Martin's Street, London : Macmillan and Co., Ltd.
- Shwe Zan Aung, B. A. 1917, 'Buddhist Prayer', *Journal of the Burma Research Society*, Vol. 7.
- Spiro, M. E. 1965, 'Religious Systems as Culturally Constituted Defense Mechanism', in M. E. Spiro (ed.) *Context and Meaning in Cultural Anthropology*, New York : The Free Press.
- 1966, 'Religion : Problems in Definition and Explanation', in M. Banton (ed.) *Anthropological Approach to the Study of Religion*, A. S. A. Monograph, no. 3, London : Tavistock.
- 1967, *Burmese Supernaturalism : A Study in the Explanation of Suffering*, Englewood Cliffs (N. J.) : Prentice-Hall.
- 1968, 'Religion, Personality and Behavior in Burma', *American Anthropologist*, Vol. 70.
- 1970, *Buddhism and Society : A Great Tradition and Its Burmese Vicissitudes*, London : George Allen & Unwin Ltd.
- 1977, *Kinship and Marriage in Burma : A Cultural and Psycho-dynamic Analysis*, Univ. of California Press.
- Spiro, M. E. and R. D' Andrade 1958, 'A Cross-Cultural Study of Some Supernatural Beliefs', *American Anthropologist*, Vol. 60.
- Stern, T. 1968, 'Ariya and the Golden Book : A Millennarian Buddhist Sect among the Karens', *Journal of Asian Studies*, Vol. 27.
- 杉本良男, 1980, 「〔研究動向〕 宗教・儀礼・世界観」『社会人類学年報』 Vol. 6.
- Tambiah, S. J. 1970, *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand*, Cambridge Studies in Social Anthropology, no. 2, Cambridge Univ. Press.
- 田村克己, 1980, 「上ビルマの一農村における年中儀礼と二元性」『鹿児島大学南海研紀要』 Vol. 1.
- 1981, 「上ビルマの村落の構造と秩序」『鹿児島大学教養部史学科報告』 Vol. 30.
- Temple, R. C. 1906 a, 'A Native Account of the Thirty-Seven Nats', *Indian Antiquary*, Vol. 35.
- 1906 b, *The Thirty-Seven Nats*, London : W. Griggs.
- Terwiel, B. J. 1979, *Monks and Magic : An Analysis of Religious Ceremonies in Central Thailand*, Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series, no. 24.

Yalman, N, 1969, 'On the Meaning of Food Offering in Ceylon', in R. F. Spencer
Cappell, N. (ed.) *Forms of Symbolic Actions*, Univ. of Washington Press.